

松会の宗教史・民俗史：近世における神仏習合的祭礼の実像と近代における修験霊山の表象

山口, 正博

<https://hdl.handle.net/2324/1455994>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 山口 正博

論文題名 : 松会の宗教史・民俗史—近世における神仏習合的祭礼の実像と近代における修験霊山の表象—

区 分 : 甲

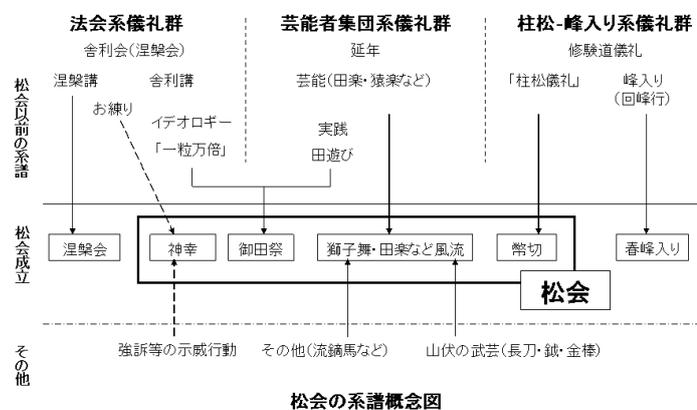
博士論文の要約

本論文は近代以前の英彦山を中心とする修験寺院の組織・儀礼・思想に関する実態を究明する第一部「英彦山修験道の宗教史・民俗史」と、近代以降に英彦山修験道が解体されて旧修験寺院の事物が脱文脈化・再文脈化されていく変遷を概観する第二部「北部九州における修験道の近代」から構成されている。

第一部序章では松会の前提として、執行者である英彦山山伏の九州内での位置づけと松会の前段階の行事である潮井採りの概観を行った。英彦山派は九州では本山派・当山派と並んで九州内の山伏の勢力を三分していた。各派の山伏の分布と合わせて英彦山での檀那場の等級を照らして地域ごとの英彦山との関わりを考察した。また、潮井採りは今日でも道中の集落が一行を歓待する習わしがあり、その創始は松会成立よりはやや遅れるが、海岸での修行など英彦山修験道の古層と関わりのある地が選ばれているようである。

第一章では松会という祭礼が英彦山でいかに成立したのかを考察した。松会は旧暦 2 月 14・15 日に行われ、柱松の頂での幣切・田遊び・神幸・風流（獅子舞や剣舞などの芸能）の 4 つの構成要素からなる。各要素には松会の成立以前に遡れる 3 つの系譜がある。ひとつは 13 世紀初頭からの舍利会の系譜を引く法会系儀礼群、次に法会に出仕していた芸能者集団の系譜を引く芸能者集団系儀礼群、最後に英彦山独自に展開した修験道儀礼の系譜を引く柱松 - 峰入り系儀礼群に分けられる。前 2 者は中世の一般的な寺社祭礼とも共通するものであるが、後者は英彦山における峰入りの整備とも密接に連動している。松会が柱松を中心に構築されたということから、その成立は中世における英彦山修験道の確立と表裏一体をなしていると言えるのである。

第二章では松会を成立させる契機となった柱松を取り上げた。修験寺院の柱松は松会以外では信越の戸隠・妙高・小菅と紀伊の粉河寺が知られている。これらを比較する中で共通する実践形態を抽出した。中世で途絶えた粉河寺のものはこの種の儀礼の原型を知るのに適している。また、各地方の修験寺院に柱松の事例が散見される理由として、南北朝期に大峰山の峰入りに際して柱松儀礼が行われたことがうかがえ、各地でこれを取り入れた修験寺院があったという前史を推測した。しかし、粉河寺の儀礼は失敗の危険性が非常に高いものであり、途絶えた理由もここにあった。これが松会の柱松における幣切との大きな差異であるが、16 世紀初頭の段階では幣切が行われていたと



松会の系譜概念図

断言できず、松会成立後にも柱松儀礼が徐々に整備されていったことが想定できる。このことから英彦山では柱松での儀礼を失敗の危険性を下げるような洗練化によって独自に展開したことがうかがえる。その過程に松会の成立・展開が位置付けられるのである。

第三章では松会が伝播していった経路に関する考察を行った。松会は英彦山・求菩提山・松尾山・等覚寺・檜原山・蔵持山といった豊前の修験寺院で行われていたため、まずは中世には英彦山と匹敵する規模だった求菩提山への伝播の可能性を山内組織の比較や峰中修行への連動といった松会執行の前提となる組織的基盤をもとに検討した。次に英彦山と他の山で決定的に異なっている田遊びの芸能とそこで歌われる歌の詞章を比較し、求菩提山・松尾山・檜原山・等覚寺の田遊びが同系統で、それとは英彦山が異なっていることを指摘した。このことから伝播の経路が推定できる。また、田遊びが英彦山だけ異なっているのは、求菩提山に松会が伝わる前から求菩提山では田遊びが行われていたことを示唆するものである。したがって、英彦山から求菩提山に伝わった時点で松会が小規模組織でも執行できるような簡素なパッケージ化（脱文脈化）がなされ、それによって求菩提山の影響下にあった中小規模霊山でも受容が容易となったのである。こうした修験寺院の影響関係や伝播経路が田遊びに刻印されているのである。

第四章では近世英彦山の宣度・如法経会・色衆・刀衆・御田祭・誕生会・延年・小松色衆・小松刀衆の9種類の当役を行者方・衆徒方・惣方の3派からなる山内組織の山伏がどのように担当していたのかに関して、天正4年から明治2年までの約300年間・約2300項目の記録を一覧し一定の規則性を見出すことができた。すると、各組織に昇進に必要な通過儀礼の機能を持つ主当役と、それとは別に昇進とは関係のない副当役があるという当役の二層構造が存在したことが明らかとなった。すなわち、行者方は宣度を主当役、誕生会・御田祭・小松色衆・小松刀衆を副当役とし、衆徒方は如法経会を主当役、誕生会・御田祭・小松色衆・小松刀衆を副当役とし、惣方色衆は色衆を主当役、御田祭・小松色衆・小松刀衆を副当役とし、惣方刀衆は刀衆を主当役、御田祭・小松色衆・小松刀衆を副当役とする。そして、主当役と副当役を1つないし2つ勤める例や副当役だけを勤める例など様々な形態があったが、延年だけは主当役・副当役と重複して勤める例が皆無であり、担当するのは惣方内の特定の一団に限られていたことも明らかとなった。これによって、従来複数の当役を勤めれば組織を移籍したことの論拠とされてきたが、必ずしもそうは言えず、ほとんどは規定内の出来事だったのである。

第五章では松会の中心的な要素である御田祭に関して幕末の執行者の名簿を用いて、御田盛一臈・田攪・田行事・扒指・飯戴女・汁戴女・御田・拍手といった様々な役が存在したことを明らかにした。また明治期の御田祭の記録を合わせて修験道時代の実態とともに、そこから近代における変容も合わせて推論した。さらに、英彦山霊仙寺が英彦山神社となったことで忘却された近世の御田祭をめぐる説話や大先達の著述から、御田祭をめぐる世界観を抽出した。近世の御田祭では北山殿に祀られた大己貴命が人間に農耕を教えたことにちなんで行われており、祭具の鍬・馬把や神歌はこの説話と関連付けられていた。さらに仏教的世界観が演者の人数や鍬・馬把の歯の数に付与されて意味づけが語られるなど、英彦山修験道独自の実践と世界観の相互反照的な関係が明らかとなった。ところが、明治になると御田祭は伝承されたものの、神仏分離で修験道が廃され、北山殿は破棄され祭神の大己貴命が下宮に合祀され、神歌も途絶えるなど、世界観の面では一変し御田祭と大己貴命の関係は忘却された。これに代わって御田祭に関連付けられたのが主祭神の天忍骨尊である。この神は穀霊の性質も有しており、御田祭ではこの神を称揚する歌が歌われるようになる。またこの神は皇祖神でもあり、官幣社として昇格するといった志向にも合致していたのである。このような御田祭における祭神のシフトには近代神社史が反映されているのである。

第六章では松会の名の由来ともなった柱松に関して中世・近世の実践の実態を明らかにした。松

会の多くの要素が惣方中心なのに対し、幣切だけは先達より上位の大越家が担当する重要なものであったことを明らかにした。それゆえ、柱松は印信や著述によって言及され、仏教的世界観が結び付けられて語られており、実践や世界観の流通には階層性が存在したことがわかった。また、松会の起源説話として桜本坊独自のものが存在しており、そこでは柱松の前身を神御柱と位置付けている。すなわち、柱を重視する点では広義の両部神道的な世界観も反映されている。英彦山には三輪流神道の印信も多数残されており、そうした神仏習合思想を独自展開させていたことをうかがわせる。こうした実践や世界観に関する考察をふまれば、柳田國男・和歌森太郎・五来重らの柱松に関して語られてきた依代・年占・験くらべなどといった議論は中世・近世の実態にそぐわないものであり、個々の事例に沿ってこうした理論を批判的に検証する必要性が改めて確認された。

第七章では近世英彦山において上級の山伏たちは印信を通じて思想や加持祈祷の実践方法に関する知識の伝授を行っていた。それに加えて、稀に出る傑出した山伏が思想を著述として残す場合もあった。これらの奥書にある授受の履歴を基に修験道における知識の伝授の問題を考察した。主に対象としたのは『英彦山大先達印信六々通』という、大先達以上に昇進しなければ授与されない性質のものであり、こうしたテキストへのアクセスには一定の制限があることを指摘した。印信には末尾に師弟間での授受の履歴が署名されているが、最も多く残存している能円坊亨安を例に初先達から大先達・大越家と昇進していくなかで授与された印信を対応させることで、史料の秘匿性といった社会的側面が浮かび上がってきた。翻って印信が実際に授受される場面での規定などから、印信に記された知識の性質を探った。印信は1枚の紙に記されている性質上、経典と比して情報量は圧倒的に少なく、教義といった思想面での価値づけると正確に捉えることができない。あくまでも、修行を重ねるうえで踏まえるべき前提となる知識であり、実践と不可分に存在したものなのである。今日の修験道思想研究が明らかにしたような全体性を有する視点は、近世の山伏が修行を重ねる過程で知識を習得して獲得したであろう認識とは似て非なるものなのである。

第八章では民衆の英彦山に対する態度を推測した。近世英彦山での参詣習俗の実態には山伏個人と檀家・講中との信頼関係・絆とも言い換えられるものもあった。なかには困窮した山伏が檀那株を有価証券として売却した例もある。こうなると買い取った新たな山伏が檀家回りをすることになる。民衆にとって英彦山信仰が重要であるならば山伏は仲介者でしかないわけで、誰でもよいことになるが、近世には檀那株を買い取って元の山伏に寄付し旧来の関係を継続させようと試みた例も存在したのである。こうした山伏と檀家の絆も英彦山信仰の実態把握には不可欠な側面である。しかし、そうした関係が揺らぐ可能性もある。幕末に熊本藩に捕縛された本蔵坊に対する尋問記録によると、憑き物落しを試みて失敗するなど、檀家の信頼を損ねかねない事態に直面した。これによって危機感を持った本蔵坊は汚名返上に狐を憑ける祈禱を行い、民衆に験力があることを示すわけであるが、こうした行動が熊本藩で問題とされて捕縛された。しかし、そこで藩が問題視したのは「呪術」の否定というよりも、世間を騒がせたことに力点があり、近代以降の「淫祠邪教」視とはやや異なる認識が存在したのである。

第二部序章では明治の神仏分離や廃仏毀釈が九州の修験道に与えた影響の大きさを概観した。英彦山派の多くは神社となり、檜原山だけが天台宗に帰入した。他派には教派神道に転じたり、廃絶して行事だけが民俗として残ったりすることもあった。次に松会をめぐる先行研究を概観した。その多くは民俗学・郷土史的なものであるが、各山の松会がいつ頃着目されたのかという表象の歴史として扱うことで、こうした研究が発生した社会的背景の存在が浮かび上がってくるのである。それと同時に第二部で扱う近代の社会的文脈が松会の研究史に反映されていることもわかるのである。

第九章では昭和初頭の国民的イベントを事例に郷土への意識の発生を議論した。昭和2年の東京日日新聞・大阪毎日新聞が主催し、鉄道省が後援した「日本新八景」選定の紙上イベントは葉書によ

る風景地の投票という形式をとったが、投票総数は当時の日本の人口の1.5倍にも上った。結果的に八景にとどまらず、二十五勝・百景まで選定された。こうした各地での熱狂が風景地を媒介とした郷土意識を醸成していくこととなった。この国民的イベントは後の国立公園指定運動へと継承された。最初期に指定された国立公園のほとんどが、八景・二十五勝・百景のいずれかに関係のある地であり、新聞紙上のイベントが一過性のものに終わらなかったことを示している。この過程で各地の歴史や民俗が再発見され郷土研究・民俗学が受容される素地を作ったのである。新八景選定で運動したのは英彦山だけであったが、この運動の余波が求菩提山を刺激し国立公園関連の運動へと展開していったのである。結果的には戦後の日本山岳修験学会設立へと結実するのであり、地方から発した学問領域の確立とも無縁ではなかったのである。

第一〇章では明治以降衰退の一途をたどった求菩提山が昭和初期に英彦山と連携して国立公園指定運動を展開する過程を概観した。神仏分離・修験宗廃止を経て九州の修験霊山のほとんどは神社となり、坊中は復飾・帰農・離散した。こうして明治以降、求菩提山の存在は地元以外ではほぼ忘却されていた。ところが、昭和6年に国立公園法が施行されると、全国各地でもそうであったように、求菩提山でも指定運動が盛んになってくる。求菩提山では先行する英彦山や耶馬溪の運動と連携する形で運動が形成され、地元の海軍軍医少将今吉政吉や築上新聞社社長大江俊明らが豊前山岳会や築上史談会といった団体を設立した。前者はまさに当時の国立公園設立の目的である県民の慰安と保養を目的とする登山の意義を謳って活動し、登山ルートの開拓などを行っている。後者は大正期から活躍していた郷土史家岡為造が中心となって求菩提山の歴史の研究を進めていった。こうした成果を『築上新聞』紙上において発表するなど、啓蒙活動を展開していく。このようにしてにわかに脚光を浴び始めた求菩提山をめぐる運動や言説の流布は近世さながらの求菩提山信仰の復興にも見える。しかし、そこで語られた求菩提山の価値は近世における山岳信仰とは全く異質の語り口であり、旧来の求菩提山信仰の復活などではなく、近代に生じた新たな価値観の下での脱文脈化を経た表象であった。

終章では昭和初頭の修験道の再発見が戦時下に特異な言説の下で行かたに表象されたのかに関して考察した。国立公園に選ばれた自然豊かな地の多くは山岳であった。新八景選定以来の歴史や民俗の発見によって修験道に関する再認識が深まっていった。それと同時に国立公園の意義が当初の外貨獲得から国民の保養にあると主要な価値が転換して語られるようにもなっていた。日中戦争以降になると、修験道の特色である身体性が脚光を浴び、峰入りが軍隊的行軍に最適な錬成方法であるとされるなど、戦時下の国民の精神・身体理想像として位置づけられるに至った。明治初頭の修験宗廃止によって、教義による分類で天台宗か真言宗に帰入させられ副次的な位置づけしか与えられなかった峰入り行が、きわめて近代的な価値観によって宗教とは全く違う文脈で再評価がなされたのである。英彦山でも国立公園指定に際しての有力な理由として明治に廃した修験道を挙げて申請を行っている。こうした特殊な文脈で修験道への関心が高まった時代に、今日の修験道研究の原点ともいえる古典的研究書が刊行されている。そこには学問成立の社会的背景への考慮の必要性も存在する。修験道は宗教概念との整合性を問うといった近代の洗礼以前に天台・真言寺院、神社、新宗教（教派神道含む）教団・教会、民俗、廃絶などさまざまな形態に変容した。こうした近代宗教史における修験道の得意な位置づけは近年盛んとなった宗教概念論批判にも新たな視点を提供する可能性を示唆しているのである。